文明，文化，そして日本の課題

福　島　康　人

目　次

まえがき
1．文明の発生
(1) 東と西
(2) 古代中国文明の中のコメとムギ
(3) 肉の文明とコメの文明
2．新しい文明論
(1) 陸地史観と海洋史観
(2) 人類の誕生と海の役割
(3) 衝撃的だった文明衝突論
3．文明と文化
(1) 文明と文化の違い
(2) 文明観の３つの区分
(3) 事例研究：日米文化の比較
4．文明の諸側面
(1) 文明と戦争
(2) 国民国家，グローバル化，世界文明
(3) 文明と環境問題
5．文明とわが国の課題
(1) 温故知新の江戸時代
(2) 文明の持続継承に必要な国家観
(3) ハンチントンの世界戦争シナリオ：重要な日本の対米中対応
あとがき

まえがき

私は，若いときの米国留学以後訪・滞米の機会が増え，同時に韓国人とも公私両面のつきあいが生じたことから，この国々の歴史や文化，その日本との異同に強い興味を覚えるようになった。歴史，文化とくれば，興味の対象は自然に文明へ広がっていく。が，日常身辺の現象である文化に対し，“文明”は何とも大きく，莫然としていて捉えどころがない。しかし，歴史の流れやその背景を大掴みに捉え，時代の行方を考えるうえで大変重要らしい。というわけで，徳大奉職10年の最後に，これらの問題を取りあげることにした。

1．文明の発生

(1) 東 と 西

世界の文明について考えるとき，まず頭をよぎるのはアジアとヨーロッパ，東洋と西洋の伝統的生活習慣の違いである。そしてその主たる原因は基本的には自然条件の差異に由来すると説かれている[1)]。

すなわちアジア，それも東アジアの自然環境はおもに森林と湿地であり，見通しと足場の悪さが狩猟の発達を妨げた。狩猟はせいぜい罠（わな）を仕かける“待ち”の狩りとなり，むしろコメ（米）の栽培に力を入れた。つまりコメを主食とする農耕民族の発生だ。これに対し西方には，広大な草原が広がり，その見通しのよさが“攻め”の狩猟を容易にするとともに，狩猟条件の悪くなる冬期には，秋に種を播いて初夏に収穫するムギ（麦）の栽培が試みられた。いわばムギと肉食の狩猟民族が誕生したのである。

また，農耕・狩猟民族のあいだには〈表1〉のような差異も認められると思うが，自然条件の違いが主食→居住生活の様式ばかりかスポーツや民族性の差，ひいては文化・文明の差異を生んだといってよく，その対照性には興

注1）藤本強『東は東，西は西』平凡社，1994年刊。

表1　農耕民族と狩猟民族の比較（一つの見方）

	農耕民族（特に日本の場合）	狩猟民族
1．食	コメ（粒食：そのまま煮炊きして食べる） →同時併用の野菜の栽培，肉体労働の重視	獣肉とムギ（粉食：粉に挽き，パンを焼き，めん類にこねて食べる） →石器の発達，製粉機の開発
2．衣	活動(実用)的＋形式的	活動(実用)的
3．住	地域定住。閉鎖的・自己完結型の集落形成	外向的，開放型の集落・都市の形成
4．スポーツ	定位置での技を競う個人競技中心（相撲，柔・剣・弓・空手道，太極拳，合気道など）	移動しつつスピード，連携プレーの重視（サッカー，ラグビー）
5．民族性	和，求道，環境順応型，自己抑制的	駆け引き，策略，環境作為型，自己主張的

味深いものがある。

(2)　古代中国文明の中のコメとムギ

ところで歴史は，人類最初の4大文明が約5,000年前ごろチグリス・ユーフラテス河沿いのメソポタミア，ナイル河畔のエジプトに始まり，やや遅れてインドのガンジス河周辺，さらに中国の黄河流域に興ったこと，これらのうち中国のそれだけが残り，他は消滅したことを教えている。私は先にコメの東方とムギの西方を対比したが，実は夏（か）（伝説上の存在とする見方も少なくないが）に始まり，殷（いん）・周時代の黄河流域に起った中国最古の文明を支えたのはムギ作だったという説がある。これは“コメの東アジア”という通説に反する。だが，この点については，十数年来，中国で次のようなことが新たに判明している[2)]。

それによると，紀元前1万年余りのころ寒い黄河流域のムギ栽培と並んで温暖な長江（揚子江）中・下流の周辺ではコメ栽培が行われ，紀元前200～300年前には黄河流域に先がけてコメ作文明が花開いていたことがわかった。

2）徐朝龍『長江文明の発見：中国古代の謎に迫る』角田書店，1998年刊。

これは15年前に長江流域で地層をなす大量の炭化状備蓄米，巨大な祭祀建築，さらには絹織物，漆器，竹製品が発掘され，その後も一大城壁都市跡，多数の青銅器と金製品，玉器，象牙，貝類（当時の貨幣）が続々と発見されたからだ。しかもこれらは，北方の黄河周辺に長江文明より遅れて興った殷・周時代のものより大規模かつ進歩していたという。

つまりムギに比べて，コメは連作が可能であり，味も良いため富の蓄積が早く，したがってムギ作の黄河流域より早く文明を開花させたとしてもおかしくない。にも拘らず，長江文明は大洪水に押し流され，ここで生き残った人たちが黄河周辺に逃れて文明を起した。もとより，長江流域でも文明は再び興り蜀や呉の国に受け繋がれていくが，経済的価値と芸術性にこそ優れていても記号以上の文字を生みださなかったため，やがて秦の始皇帝により黄河文明に併呑されてしまった。すなわち，漢帝国の御用史家だった司馬遷（紀元前145～同86年ごろ）の『史記』が黄河流域を中国文明の中心として描き，そのイメージの影響が最近まで残っていたのだという。だが実際には，収穫量の安定した長江流域のコメが，秦の始皇帝に始まり隋の楊帝が完成させた大運河によって運ばれ，北方のムギを支えたことが，ムギだけに依った他の３大文明に比べて，中国黄河文明の存続を可能にしたものと推測されている[3)]。

(3) 肉の文明とコメの文明

中世のころまでのヨーロッパの土地はひどく痩せ，ムギの連作が不可能だった。また牧草地にはこと欠かなかったものの，家畜のエサが足りないことが肉の供給を制約した。こうした問題改善のきっかけとなったのが，近世ジャガイモの登場だ[4)]。なにしろカロリーはムギの3.5倍もある。ジャガイモは

3）菅谷文則『なぜ中国文明は生き延びたか』（「近代文明再考」シリーズ）産経新聞，1993. 2. 18。

4）『万有百科大辞典』No. 19（小学館，1976年刊）によれば，ジャガイモは南米アンデス高地を原産とし，航海術の発達に伴い16世紀ごろからスペインをへて欧州一帯，また日本へ移入された。

人間の栄養状態をよくしたばかりか，余裕のできたムギを家畜に与えられるようになり，牛の飼育増大に道を開いた。しかも，やがて牛乳，バター，チーズの生産が食卓事情の改善→体格の向上→人口増大→経済発展→文化の振興というように，ヨーロッパ文明興隆の原動力ともなったのである。

では，長く欧州の繁栄を支え続けてきた“牛肉の文明”が，最後にもたらしつつあるのは何か。行きつく先はどこか。次の指摘は辛辣である[5)]。

第1に，現在，人間の食糧を奪っているのは牧舎で穀物をたらふくくらって飼育されている牛ではないか。途上地域で飢餓が問題になっているとき，地上の穀物生産の実に1/3が牛の胃袋に収まっている。人間の食糧にあてれば数億の民を救える小麦やトウモロコシが，上質の牛肉をつくるため大量に費やされているのだ。第2に，かつてヨーロッパの森林をはげ山に変え，今や熱帯林を縮めている原因の大半は牛の過放牧にある。さらに私見を加えれば，第3に，牛肉の摂取は人体の肥満，成人病の多発という皮肉な結果を現に生みだしている。

ついでながら，牛肉文明を上述のように痛烈に批判した米国人リフキンは，返す刀で欧米諸国の反捕鯨論の誤りを衝いている。すなわち，食物連鎖の最上位にある動物を食糧にする点では牛と鯨に差などない。むしろ捕鯨は，捕獲頭数さえきちんと制御できれば地球にやさしい持続可能な食糧生産態勢だ。逆に牛肉の“大量”生産は自然の生態系を破壊しかねない。それなのに途上・中進国（や先進国の日本まで）もが牛肉を少しでも多く食べることが豊かさのあかしとばかり牛食いへの道をひた走っている。地球という生態系を守るには牛肉の呪縛から解放されることが必要だ，と。彼の著作がもっと早く世にでていれば，日本の捕鯨関係者も国際捕鯨委員会で再々にわたり，あれほど無惨に反捕鯨諸国の軍門に下らないですんだかもしれない。

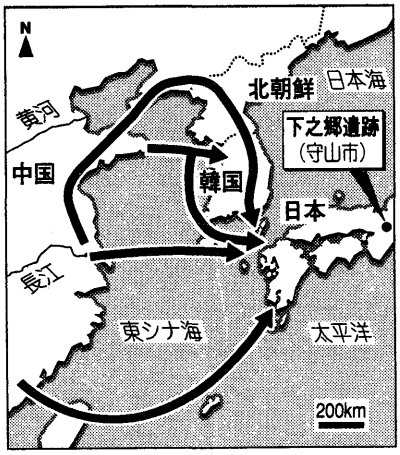
そこで，わが国のコメに目を移そう。日本人は，恵まれた自然条件のもとで長いあいだ水田稲作を主な産業とし，いわゆる農業立国として独自の文化（あるいは文明）を築いてきた。コメ作りがわが国へ伝来したのは約2,000年

5）ジェレミー・リフキン『脱牛肉文明への挑戦』ダイヤモンド社，1993年刊。

あまり前と見られており，その品種と経路については，まだ定説らしいものはなく，温帯型ジャポニカ種が大陸から朝鮮半島を経て伝わったとする半島経由説が有力視されてきた。

ところが，先ごろ滋賀県守山市の弥生時代中期環濠集落・下之郷遺跡（紀元前200～100年前）から出土した多数の稲のもみをDNA分析した佐藤洋一・静岡大農学部助教授は，去る99年3月，「温帯型ジャポニカ種と，フィリピンやインドネシアで栽培される熱帯型ジャポニカ種が混ざっていた」と発表。さらに，東南アジアや中国南部から沖縄，南西諸島経由もしくは直接海を渡ってきた“海上の道”も重要だと述べたが[6]（図1参照），その1週間後には，中国長江下流に広がる江南地域の各時代の出土人骨と福岡・山口県下の縄文・弥生両時代のそれを3年にわたってDNA分析した日中共同調査団の山口敏・国立科学博物館名誉研究員は，2,500年前に江南人が稲籾（もみ）を持って直接やってきたと公表[7]。弥生人とイネの源郷に有力なデータを提

図1　稲作伝来の推定経路



出所：産経新聞，1999. 3. 13

6）産経新聞，1999年3月13日。
7）同上，1999年3月19日。

供したわけだが，これについて中国側では，彼らが春秋時代の戦乱から逃れ，江南と似た温暖な地域を求めて福岡に上陸したものと推測している。

ともあれ，わが国は土地柄，日照，温暖さ，降雨などの自然条件に恵まれ，コメ作り中心の農耕社会を築いてきた。ただ，コメを主食にしたといっても，誰もが常に米飯を口にできたわけではないし，また実際にはコメ＋野菜＋魚を食事の3大要素としたため栄養のバランスという点でも大変優れていた。わが国は戦後高度成長の過程で史上初めて貧乏人のいない（に近い）状態，そして食えない人のいない状態を実現した。が，同時に洋食の摂取量を増大させ，医学の進歩と相まって男女の寿命こそ世界一となったが，脂肪の取りすぎが肥満と成人病の多発をもたらし，「昭和30年ごろの和食中心の食事に戻れ」などと警告され始めている。

なお，コメ文化の日本というが，縄文人も動物の肉を食べていた形跡はある。だが，まもなく肉は口にしなくなった。どうしてか。これには，以下のような見方がある[8)]。

まず，4世紀に大和朝廷の全国統一が進み，中央集権の体制を整える過程で，古代律令国家は稲作農耕を社会的な生産活動の基本として選び，天皇が“コメの司祭者”となった。他方では仏教が国家鎮護の中心に据えられ，殺生禁断の思想が“肉の排除”に繋がり，また神道の穢(けが)れの観念がこれと重なった。その後，封建社会の中で“コメの秩序”が定着していった。さらに徳川時代に入り，幕藩体制の石高制によって，北海道と琉球を除く幕府の支配領域でそれはさらに徹底，浸透し，逆に肉の生産・流通・販売に携わる人々は，コメの秩序を乱すものとして賤視されたのである。

2．新しい文明論

(1)　陸地史観と海洋史観

さて，今世紀に入ってから幾多の論客が世界史の中の文明について論じ

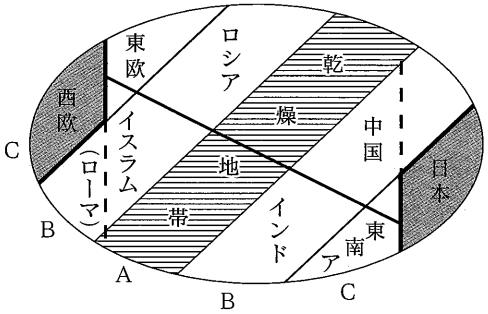
8）原田信男『歴史のなかの米と肉』平凡社，1993年。

るようになった。その先駆をなすのはドイツの哲学者O. シュペングラー（1880～1936）であり，歴史的相対主義の立場から世界の文化を生成・消滅する有機体と見なし，西洋文明の没落を予言[9]。続いてイギリスの歴史家アーノルド・トインビー（1889～1975）はこうした西欧衰亡という危機意識を受け，世界の歴史は混乱期と統一期がくり返すという自己の史観を前提としてアジアの勃興に注目した[10]。にも拘らず，文明論全般の主流はいわゆる近代主義理論に基づく西欧中心の史観であり，“高度先進のヨーロッパ”と“後進停滞のアジア”というイメージが一般化していた。そしてわが国自身が久しく，明治以来の日本は西欧文明に憧がれ，これを模倣・追跡し，漸く近代化に成功したものと理解してきた。だが戦後まもなく，これら西欧中心の文明論に異を唱え，わが国から欧ア対等の史観が提示されたのである。

ア．生態史観

すなわち，梅棹忠夫教授による“文明の生態史観”これである[11]。その内容は図2のような楕円形で示され，日本と西欧は第1地域，残る旧世界全体

図2　文明の生態史観から見た世界



A：乾燥地帯，B：準乾燥地帯，C：湿潤地帯

出所：注11）に同じ

9）村松正俊訳『西洋の没落』Ⅰ・Ⅱ，五月書房，1969年刊。
10）桑原武夫他訳『図説・歴史の研究』学習研究社，1975年刊。
11）梅棹忠夫『文明の生態史観序説』中央公論，1956年2月号。その後1967年，中央公論社より『文明の生態史観』として刊行された。

が第2地域と2分される。そもそも人類の文明は中央の乾燥地帯(A)から始まったが，その遊牧民たちは周辺の準乾燥地帯(B)を荒らし，破壊した。ところがその暴力も，東西両端に位置する第1地域，つまり中緯度湿潤の温帯(C)には及ばず，西欧と日本は遅れて出発しながらも，西欧はローマ，日本は中国といった第2世界から文明を導入し，やがて封建制度→ブルジョア支配をへて資本主義による近代化を成しとげた。

これに対し第2地域では，遊牧民から蒙った打撃のため生産力を浪費して専制帝国が生れ，あるいは第1地域諸国の植民ないし半植民地となり，今漸く近代化への道を歩みつつある。なお東南アジアと東欧は一種の中間地帯として文明的に不安定な性格を持つとされているようだ。それでも，第1地域の一部であることに変りなく，近年における東アジアの成長，東欧の西欧への接近→発展（？）を40年前に見越した点も注目に値しよう。こうした発想は，もともと生物学から出発した生態理論によるのだという。日本の近代化を西欧発展史の中に位置づけて自らを慰めていたわが国で，日本あるいは東アジアをヨーロッパと対等に置く独自の史観が登場した意義は誠に大きいと言わねばならない。

イ．海洋史観

しかも最近にいたり，この梅棹理論を批判する“海洋史観”が現われた[12]。挑戦者の川勝平太教授は，生態理論を始めこれまでの文明史観の多くは陸地史観であり，世界に広がる海洋を無視している。これを視座に据えれば見えないものが見えてくるとし，ユーラシア大陸も地球にとっては海に浮かぶ一つの大きな島にすぎず，地球の歴史を島々と海のかかわりとして壮大かつ独創的な理論を展開する。

さて，500年前における文明の華(はな)はユーラシア大陸のほぼ中心部に位置するインド，中国，イスラム世界であり，ヨーロッパと日本は遅れた辺境にすぎなかった。そればかりか，海洋イスラムと海洋中国からなる海洋アジアの

12）川勝平太『文明の海洋史観』中央公論新社，1997年刊。著者は1998年4月，早大から国際日本文化センター（京都）に移った。

物産に依存しないでは，多少とも豊かな生存を維持することができなかった。すなわち15～17世紀にヨーロッパは海洋イスラムから，日本は海洋中国から胡椒，香辛料，香料，茶，砂糖，絹，綿，染料，陶磁器を輸入し，代りに金，銀，銅の恒常的な流出を強いられた。そこで，この流出つまり貿易赤字をなくそうとして，生活のアジア化→輸入代替品の製作→脱アジア化に努め，西欧は“近代世界システム”をつくって“産業革命”を，また日本は“江戸鎖国システム”によって国内自給体制を整え，“勤勉革命”をなしとげる。

つまり，この2つの革命（英語はどちらもindustrial revolution）はアジアからの離脱衝動に支えられ，ユーラシア大陸の両端でそれぞれ独立して起ったわけだ。言いかえれば，18世紀後半にイギリスで最初に起った産業革命にヨーロッパ大陸とアメリカが追随し，後発の日本がさらにこれを追跡したという文明発展段階論の通説は間違いだということになる[13]。川勝理論は，ヨーロッパが仕上げた“大宇宙”と日本のそれ“小宇宙”とが外見上どれほど違って見えようと，その本質は同じだと強調し，さらには，アジアの海の持つ近代化のダイナミズムから，21世紀に太平洋文明の時代の到来までを視野に入れており，日本からの雄大な情報発信ともなっている。

(2)　人類の誕生と海の役割

前述の海洋史観により，人間社会の近代化と文明の形成に海が決定的な役割を果たしたことを知った。だが最近では，その海こそ人類誕生の場であったという説が有力になってきている。では，人間の祖先はどのようにして類人猿と異なる道を歩いたのか。現在，3つの主要な学説がある[14]。第1はこ

13）中央公論新社は従来の欧州中心史観からの脱却と21世紀への展望を試みる『世界の歴史』全30巻を刊行中であり，その1冊，加藤祐三・川北稔『アジアと欧米世界』1999年刊も，「15～16世紀のアジア海域はヨーロッパ人が進出して活性化したのではなく，逆に彼らが繁栄するアジアへ参入したのであり，当時のアジアは世界文明の中心であったし，アジア物産への憧れ→脱亜の努力が産業革命を引き起こしたのだ」と，川勝理論を補強する見解を展開している。

14）エレイン・モーガン，望月弘子訳『人は海辺で進化した：人類進化の新理論』どうぶつ社，1998年。

れまで最も有力視されていたサバンナ説。すなわち，われわれの祖先はアフリカ東部の森林の木の上で暮らしていたが，気象の変動で森が急減したため草原での生存を余儀なくされ[15]，そこで狩りをする必要から二足歩行，道具の使用，言語の獲得といった機能を身につけるようになった，と。第2のネオテニー（幼形成熟）説は，胎児・幼児期の体の特徴を進化上の秘策として一生涯保持し続けたというもの。

そして第3がアクア説で，水生類人猿がヒトの始まりだったとする仮説だ。その証拠として，たとえば，①胎児は子宮の羊水に浮いている，②大型水生哺乳類と同じく体毛がなく皮下脂肪で体温を保つ（ただし陸へ上ったため汗腺が発達し，これで体温を調節するようになった），③嗅覚，触覚，そして或る程度視覚が後退した代り聴覚が発達。音を最大のコミュニケーションの手段とし（やがて言葉を獲得し）た。④対面性交をする，⑤海辺の少しでも深いところへ行けるように，あるいは時折呼吸ができるように二足歩行を覚えた，などの点が挙げられている。

人類史には類人猿とヒトとの関係を結びつける未発見の動物（または，その化石の空白期間），いわゆるミッシング・リンクがあるが，アクア説はこれに見事に答えることができる。つまり海（水）中で生息した期間を人類史の空白と受けとれるからだ。もっとも，陸から海へ入り，再び陸上へ戻ったのではなく，もともと生物は海で進化したのち陸へ上がったという見方もある[16]。それが，いつごろだったかについては，まだはっきりしない[17]。なお，

15）人間の祖先が森から草原へ出た事情については，つぎのような推測がある。すなわち，アフリカ東部を南北1,200キロにわたって走るタンガニーカ湖は地球最古の湖の一つであり，現在でも毎年のように新種の魚が発見されるというように生命を育む豊かな湖でもある。湖の東側には数千メートルの山々が連なるため，湖の西側には雨がよく降って森が残り猿はそのまま生きた。逆に，山脈から東側では雨が降らなくなって森が亡び，人間の祖先は草原へ出ていかざるをえなくなった。（『たけしの万物創世紀』朝日テレビ，11. 1. 27）

16）松永是（ただし）『海と文明』(4)，読売新聞（夕刊），1998. 1. 7。

17）注14）の著者モーガン氏は「数百万年前ごろ類人猿の一派が海へ入り，数百万年後（？）に海が干しあがって陸へ戻り，ヒト（人）が誕生した」と想像し，

（次頁脚注へ続く）

1998年夏，ドイツ・ミュンヘン工科大学のクローディア・フーバー博士らは原始地球の海底環境を再現した実験で生命発生に不可欠の蛋白質を生成することに成功し，生命海底誕生説に有力な裏づけを与えた[18]。

ともあれ，このように何らかの経路で人類が誕生し，逐次世界中に広がって社会生活を営み，文化，文明が生まれ，それがまた後れた地域に伝わる段階で海は再び一定の役割を果たした。すなわち，巨大な文明の篩(ふるい)の役だ[19]。たとえば，わが国は古くから大陸の漢字，仏教と寺院など多くの文物を輸入したが，日本列島と大陸のあいだに横たわる海が篩にかけたかのように，話し言葉，仏事の方法，寺院建築，階級制度は棄捨している。つまり大思想，大技術，知的情報を伝え，日常の風俗習慣や立ち居振る舞いは遮ったわけだ。こう考えれば，受け入れる日本人の民族的資質もあったにせよ，海は文明を運び文化は伝えなかったとも言えるだろう。

(3) 衝撃的だった文明衝突論

ところで，1993年夏，米国の著名な雑誌にハーバード大学教授サミュエル・ハンチントンの『文明の衝突？』[20]が発表されてわが国の識者に大きな衝撃を与え，学界・マスコミ界で論争を呼んだ。そして5年後の去年夏，これに書き足し内容を膨らませた『文明の衝突と世界秩序の形成』（原書名の訳。ただし日本版では単に『文明の衝突』となっている。）[21]が刊行されて再び注目を浴びた。その要点は，だいたい次のとおりである。

- 冷戦後の世界ではイデオロギーではなく，異“文明間の衝突”が増える。つまり，それぞれの民族が自己のアイデンティティ（存在価値）を主張

注16）の松永教授は「36億年前ごろから生物が海中で進化し，2～3億年前に陸へ上がり，一説には，約20万年前に人類が登場したといわれる」と述べている。

18）米科学誌「サイエンス」1998. 7. 31で発表。ただし朝日新聞，1998. 8. 3による。

19）山崎正和『海と文明』(1)，読売新聞，1998. 1. 1。

20）Samuel Huntington “The Clash of Civilization?,” Foreign Affairs, Summer 1993.

21）サムユエル・ハンチントン，鈴木主税訳『文明の衝突』集英社，1998。

し，自分の存在を他者に認めさせようとするため異なるアイデンティティを主張する相手と対立し，文明の断層線（front line）で衝突が起きる。

- 世界には西欧（アメリカを含む。キリスト教），中国その他（儒教），日本，イスラム，ヒンズー，ロシア（スラブ），ラテンアメリカ，アフリカという8つの文明がある。世界中に通じるような普遍的な文明などはありそうもなく，やがて経済を成長させた中国（儒教）と人口の増大したイスラムが組んで西欧と敵対する“西欧対非西欧”という対立の構図が生まれるだろう。
- 日本は一国だけで一つの文明を持つ独自の，しかし孤立した存在であり，どの国とも文化的な繋がりを持たず，世界的覇権国アメリカと東アジアの覇権国中国との間でその関係をどううまく調整するかが大きな課題になると同時に，それが東アジアと世界の平和を維持するうえで決定的要因となるはずだ。
- 結局，あらゆる文化に共通する人間の普遍的性質を追求すること，要するに文明に基づいて“世界秩序を形成する”ことが世界戦争を防ぐ最も確実な安全装置だ。

まず，ハンチントン教授の最初の論文はわが国言論界に大きな衝撃を与え，多くの反論や批判を招いた。たとえば，西洋が善で非西洋は悪とするかのような潜在的独善性，そして非西洋社会に西洋基準への同化を強いる性急さこそ米国の悪い点だ[22]，西洋つまりキリスト教だけが民主主義の普遍的価値原理を提供するというが，キリスト教のおひざ元からナチズムが生まれた一事に照らしても西洋至上主義は疑問だ[23]，既に崩壊過程にある古典文明の意義をことさら強調するのは見当はずれであり，今日の混迷と分裂の原因は近代化を支える産業化と民族意識と平等化の相互補強関係が崩れた点に根ざしている[24]，日本の国際的孤立化が運命的なものとする見方にはわが国への

22）五十旗頭（いおきべ）眞『“文明の衝突”ハンチントン教授との議論』読売新聞夕刊，1994. 4. 18。
23）注22）の中の山崎正和教授の発言。
24）佐藤誠三郎『近代はどこへ向かうのか』アステイオン誌，1998年9月号。

鋭い刺を含んでおり，日米間には国際政治上の協調関係を保持するに足る文明上の共通性があることを自覚し，この挑発状に乗せられてはならない[25]，などだ。

しかし今回の書物では先の論文の標題にあった疑問符（？）が削除され，この5年間における民族・宗教など異文明間の紛争増大は，国際政治を文化・文明のアプローチで見ることの妥当性を裏づけたと自信を示した反面，論文への批判，とりわけ西欧文明優位視反発に配慮し，また世界に通じる普遍的な文明はないと明言したほか，2010年には世界戦争が起り日本は中国と組んで対米戦に突入するというシナリオを新たに加えている。

補足：「2010年の世界戦争シナリオ」
南シナ海の石油利権をめぐって中国がベトナムへ侵攻し，反発したアメリカと戦闘状態に入る。日本と国連は停戦交渉を試みるが失敗。日本は中立を宣言し，在日米軍基地を封鎖するが，中国の強い要求に従って米軍との開戦をよぎなくされ，結局，「米・欧・露・印」対「中国・日本・イスラム」の世界大戦に突入する。やがて欧・露軍がシベリアから万里の長城を越えて北京を攻撃し，最後の勝利を収める。

今回の著作がさらに精しい説明を加え，心なしか謙虚な筆運びになったとはいえ，なお，①アメリカ優位の論理，②却って民族間の対立を煽ることにならないかとの懸念は残る。また，③一方でロシアと西欧を異文明として切り離し，他方でアメリカと欧州連合（EU），特に独・仏両国を一緒にしたのは単純にすぎるし，アメリカ対中国・イスラム対決の構図は文明の衝突というより帝国の戦いというべきものではないか，④日本とアメリカは日米安保条約によって結びつきの意義を再認識することこそあれ，日中が一体化するとは考えにくく，世界戦争のシナリオはまずありえない。⑤あるいは逆に，クリントンの米国第一主義とこの文明衝突の思考が結びついた“ハンチントンの罠”に日本が陥り，反米感情の単純な裏返しとして親中国一辺倒の“ア

25）野田宣雄『“文明の衝突”をめぐって（下）』東京新聞夕刊，1996年4月20日。

ジア主義”が台頭する可能性も全くないとはいえないかもしれない，⑥さらに，“文明の衝突”という現象の多くは最初から存在するというよりは，イラクなどイスラム諸国との衝突のように，アメリカが自分勝手に描いた仮想現実に向って突き進んでいる気配さえある[26]。

だが，このような批判にも拘らず，ハンチントン文明論の持つ意義は大きく，また重要である。その第1は，世界的歴史観だった従来の文明論を国際政治学の発想で捉え，21世紀の世界の展望に重要な視点を提供したこと，第2に，わが国としては日本が一国で一文明をなす唯一の国であり，文明のはざまで孤立化する恐れがあるとの指摘を，やはり重く受け止め，他文明との共通性の模索を忘れてはならないこと，だ。また第3として，ハンチントン教授は，世界戦争シナリオの可能性が大きいとは思えないが，ナチス・ドイツの例に見られるように新しいパワーの出現は戦争の原因になり易く，したがって中国の台頭が世界を不安定にする可能性を考えさせるため追加したと述べており[27]，世界，アジア，そしてわが国の安全保障問題にも文明論への考慮を払う必要が加わったといえよう。

3．文明と文化

(1)　文明と文化の違い

これまで文明を定義づけないまま，その誕生や戦後に新しく内外で登場した文明論について述べてきた。では，そもそも文明とは何か。そこには，われわれ民族や人類を包みこんでいる何か大きい時代背景のようなものというイメージはある。が，改まって聞かれると必ずしもはっきりしない。それに，文明よりはもっと身近にある文化とどう違うのか。ここで，一応整理してみたい。実は，学問としては若いが比較文明学という領域があり，そこで文明

26）①，②は私見。③，④は山内昌之『新世紀の文明論的構図』（中，下），読売新聞，1999. 1. 27/28。⑤，⑥は山内昌之『ワシントンの罠に突き進むアメリカ』「諸君」，1998年11月号。

27）『“文明の衝突”のハンチントン氏に聞く』朝日新聞，1998. 12. 13。

の定義づけ，文化との違い，文明の比較などが行われ，手引き書も刊行されている[28]。

そこで文化と文明の概念，両者の基本的差異だが，同書はつぎのように述べている。すなわち“文化”は人間がつくりだし，人が自然に対して手を加え，そこに一定のパターンがあり，複合体をなしている。これに対して“文明”には定説がない。しかし，文化と対立するのではなく連続したもので，一つの進んだ（つまり，文化の延長線上にある）特殊なあり方，文化の発展した形態をいう，と。また，文化が内核に位置し，内へ向かう求心的傾向を持つに対し，文明は一つの文化生活圏の外殻をなし，そこでは外へ拡大する遠心的傾向が働くとし，さらに，文化をソフトウエアとすれば文明はハードウエアだとの対比規定もしている。

それから，両者の関係や特性について，つぎの諸点を挙げている。

- 2つは密接に結びつき，文明は文化を反映して形成される。
- 文明はひとたび形成されると文化から独立し，自立したものになる。
- 2つの間には相関的な裏腹の関係や相互作用があり，文明が変ると文化も変る。

このほか，文明概念のまとめとして以下の7つの視点を示し，第8項でそれらを総括している。

①文明は，風土つまり気候や生態系と深いかかわりを持ち，地理的にも広域にわたる。

②文明は，歴史的な伝統であり，比較的長い時間的スパンを持ち，社会が変ってもなお存続する。

③文明は，洗練化された生活システムであり，衣食住などの生活様式を意味するが，それは単なる生命維持以上のものである。

④文明は，高度な社会制度であり，そこには政治体制，法律制度，階層構

28）伊東俊太郎編『比較文明学を学ぶ人のために』世界思想社，1997年刊。本書によれば1961年に国際比較文明学会が，また1983年には日本比較文明学会が発足し，著者伊東氏が双方の会長を務めている。大学でも比較文明学や文明論の講座を設けるところが増えている。

造などの設立がある。

⑤文明は，経済組織であり，貨幣などを媒介とする交換ネットワークの形成とそれによる財の積極的な蓄積を伴う。

⑥文明は，集団的な技術であり，建築，土木，水道，道路など大規模な文明の装置をつくりだし，これを支える。

⑦文明は，知的，精神的，美的で，しかも制度化され組織化されている。たとえば科学，宗教，芸術でも制度化，組織化されればこれにあたる。

⑧要するに文明は，これら7つの関連しあった条件が統合されている一つの構造である。

文明の定義，特性についての見解補足

- 定義　川勝平太：①衣食住のスタイル，つまり生活は文化である。経済発展は文化を成熟させるためにある[29]。②文化には人間の生活様式という学術的定義があり，民族の数だけ，つまり3,000は違う文化がある。これに対し，文明の定義は学者の数だけあるが，いちばん解り易い定義として他国の人から憧れられる文化だといいたい[30]。

  山内昌之：歴史における因果関係の連鎖を内包している時間や空間の範囲をいう[31]。

  松本健一：文明はつねに世界文明的だが，文化は民族それぞれが生きてきた歴史と風土に従って個性的であり多様である[32]。文明は文化の単なる拡大・上位概念ではない。

  サムュエル・ハンチントン：文明も文化も人びとの生活様式全般をいい，文明は文化を拡大したものである。いずれも，価値観，規範 社会制度，何世代にもわたって最も重視されてきた思考様式を含む[33]。

29）川勝平太『近代文明を読み直す』（下），読売新聞，1998年6月18日夕刊。
30）川勝平太vs松本健一対論『海洋史観はアジアを変えるか』正論，1998年5月号。
31）山内昌之『新世紀の文明論的構図』（上），読売新聞，1999年1月26日。
32）松本健一『文明は文化の上位概念か』産経新聞，1998年10月8日。
33）サムュエル・ハンチントン，鈴木主税訳『文明の衝突』集英社，1998年刊。

●特性　サムュエル・ハンチントン：文明の観点，方法論，焦点，概念は多種多様だが，その性質，アイデンティティ，中心的主張は次のように一致している。すなわち，①ヨーロッパ至上主義の単数形文明観と世界には幾つもの文明があることを認める複数形の文明観がある。②文明は文化の総体をいう。（ただし19世紀のドイツでは“例外的に”文明は機械，技術，物質的なもの，文化は価値観，理想，高度に知的，芸術的，道徳的なものと区別した。）③文明は包括的，つまり最も広範な文化的まとまりであり，人を文化的に分類する最上位の範疇である。④文明は永遠ではないが長命でもある。⑤文明は文化的なまとまりであり，政治的なそれではない[33]。

以上，概念の比較的はっきりしている文化とそうでない文明を比べることは容易でないが，やや強引に表2のようにまとめてみた。

表2　文化と文明の比較（まとめ）

	文　化	文　明
1．定　義	●衣食住など人間の生活様式とその背景にある考え方	●文化の延長線上にあり，その発展した形態，ただし文化と対立するものではない
2．定義の明確さ	●定義はほぼはっきりしている	●学者の数だけあり，定説はない
3．存在する数	●世界の民族の数（約3,000）だけ存在する	●ハンチントン：8（p. 13） 伊藤俊太郎：23（図4）
4．特　徴	●内核をなし求心的傾向を持つ	●外殻をなし遠心的傾向を持つ
	●ソフトウエア（生活様式の背景にある考え方）	●ハードウエア（政治・経済・社会などの制度化，組織化を伴う）

注：本論で紹介した諸説から分かり易いものを対比して並べた暫定的なものである。なおハンチントン教授は，文化も文明も人びとの“生活全般”をいい，文明を文化の拡大した“上位概念”と規定している。しかし，松本健一氏のように文化は多様だが，文明は普遍的，世界文明的だとする見方もある。

(2)　文明観の3つの区分

文明の見方，発展段階，中心的文明と派生した文明などの対比について，一般には以下のような区分や見方がある。

ア．文明の見方：

文明の見方には西欧文明が世界文明化するという説と，これを否定し複数文明の併存を主張する説がある。

- 発展段階説：文明はギリシャ・ローマ→中世キリスト教世界→近代西欧文明→西欧文明の世界化というヨーロッパ中心の単線的系譜を辿り，他文明圏を無視ないし軽視するもの（例：ゲオルグ・ヘーゲル，ドイツ人，1770～1831）。
- 多文明圏説：西欧中心の一元的文明史観を否定し，世界には独自の形態を持つ複数の文明が存在してきたとするもの（例：前出シュペングラー，トインビー）

イ．文明の発展段階

文化の誕生から近代文明の形成に至る人類の歴史は一般に5段階に区分され，図3のように文明形成の5段階説または5大革命論と名づけられている。

図3　文明形成への5段階説（または5大革命論）

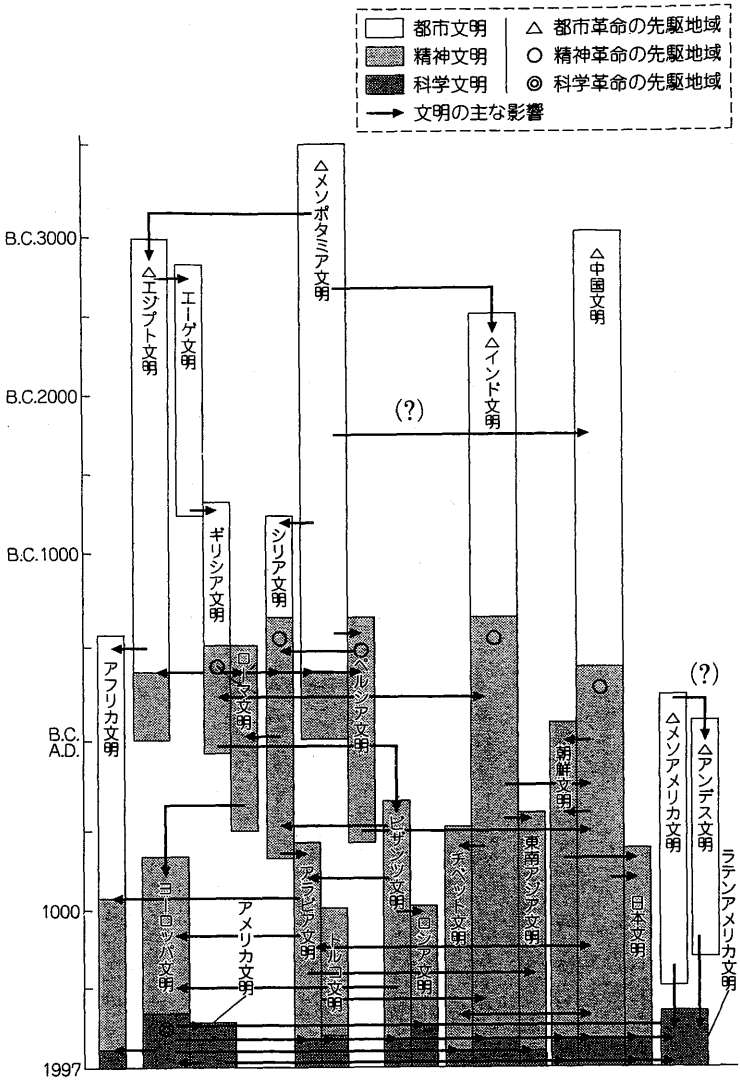
1. 革命の区分	人類革命 →	農業革命 →	都市革命 →	精神革命 →	科学革命 →	環境革命？
2. 歴史上の特徴	人間の出現	農耕の開始	都市の形成	高度な宗教・哲学の誕生	近代科学の創出	環境問題優先への大転換（模索中）
3. 文化・文明の登場	文化の誕生	文化の蓄積	4大文明の成立	精神化の原点	近代文明の始まり	
4. 年代	500万年前	7000～1万年前	前3500～前1500年	前800～前300年	17世紀～現在	21世紀？

出所：注28）の伊東俊太郎氏による記述の要点を図表化した。

ウ．文明の発生と派生

これまで地球上には通算23の基本文明が存在したという。それは図4でわ

図4　文明圏（23）の変容と交流



出所：注28）（伊東著）と同じ。

メソポタミア	エジプト	エーゲ	インド*	中　国*
ギリシャ	ローマ	シリア	ペルシア	アラビア
トルコ	アフリカ*	ビザンツ	ヨーロッパ*	ロシア*
日　本*	朝　鮮	チベット	東南アジア	メソアメリカ
アンデス	アメリカ*	ラテンアメリカ*		

注：＊印はハンチントン教授の分類（8つ）と同じもの。なお，ハンチントンの場合はアメリカを西欧の中に含めている。また，ハンチントンがイスラムと一括したものは，ここではシリア，アラビア，トルコなどに分けられている。

かるように以下のとおりである。

なお，“基本文明”は①一定の文明の個性，スタイル，システムを持ち，②その文明の発展が自立的であり，③寿命も（約1,000年以上と）長いものをいい，その近くには独自性と自立性に乏しく寿命も概して短い“周辺文明”が多数存在するとされている。ただし，基本文明と周辺文明の区別は相対的であり変化する。事実，日本文明もかつては中国文明の，ヨーロッパ文明はローマ文明の周辺文明だったのである。

(3)　事例研究：日米文化の比較

アメリカ（人）と日本（人）にはボディランゲージを見ても逆のことが少なくない。たとえば，のこぎりの使い方では米国人が押すとき，日本人は引くときにそれぞれ力を入れて使い，数を数える場合だと米国人は指を順次立てていくが日本人は指を折る。また，おいでおいでの手振りも米国人は掌を内向きにして肩先でその先端を手前に曲げ，日本人は掌を外向きにしその先端を下へ曲げる。こうしたジェスチャーは差異のほんの手始めにすぎず，生活様式やその考え方つまり文化には反対のことが多く，大変興味深い。両国が相互に地球の裏側に位置し，地球の中心に向かって逆立ちした格好で立っているからというだけでは説明がつかない。表3は，私なりに日米の日常生活・習慣とその背景をなす社会風土を比べたものである。

で，私自身は日米文化の違いの由来・根源を国の生いたち→社会風土の特徴に求めている。すなわちアメリカでは「異民族の競争社会」と「多様性」，

表3　日米文化の比較（一つの見方）[34]

	アメリカ	日本
1．社会風土		
(1)特　徴	●異民族の競争社会（競いあい精神） ●多様性→権力分散	●同質民族の家族社会（助けあい，もたれあい精神） ●画一性→権力集中
(2)行動原理	個人主義	集団主義
(3)国民性	合理性重視（ドライ）	義理人情（ウェット）
(4)意思決定	トップダウン：リーダーシップ尊重	ボトムアップ：合意尊重
(5)仕　事	能力(実績)主義	年功(減点)主義
(6)教　育	自由，ほめる教育，創造性重視	画一化，べからず教育，記憶力重視
(7)宗　教	キリスト教	(仏教＋神道)
(8)自然観	征服・利用の対象	威敬・観賞の対象
2．日常生活・習慣		
(9)基本的態度	自己主張：他人との違いを示す	自己抑制：謙譲の美徳，他人との違いを押える
(9•1)発　言	有弁は金	沈黙は金
(9•2)会　話	ピンポン（球の打ちあい）：議論重視	ボーリング（一方通行）：ご意見拝聴
(9•3)態　度	自分を大きく見せる	自分を小さく見せる
(9•4)表　現	明白に	曖昧に
(10)慣用句	Take it easy！（まあ，気楽にやれよ）	頑張って！

日本なら「同質民族の家族社会」と「画一性」だ。米国では約400年前（日本で江戸幕府が開かれたころ）以後，主としてヨーロッパから渡ってきた多くの移民が国造りを始めたわけで，国土は広く資源は豊かで開拓の仕事は山ほどあるが，誰にも身分がなく多様な人たちの寄り集まりだった。もともと彼らは狩猟民族の後裔であり，競い合いの中で雄弁で説得力，実行力のある

34）日米文化の比較については金山宣夫『比較文化のおもしろさ』大修館，1989年刊が精しく論じている。しかし，この表はあくまで私自身の体験と考察を中心にまとめた。

者がリーダーに選ばれていく。同時に見知らぬ人たちの中で真に頼れるのは自分個人しかなく，仕事は合理的・能率的に進める必要があった。これに対し日本は農耕民族であり，縄文・弥生時代から暫くのあいだアジア・太平洋各地からの渡来人で構成された日本民族も，それ以後は混じりあって同質となり，厳しい自然条件の中で近隣が話しあい，助けあって農耕採収を行った。そこから他人と違ったことは控える合意尊重，人並み重視，横並び思考，集団主義，ウェットな義理人情社会が生れていった。

こうして日常生活・習慣の面で，アメリカでは他人との違いを示す「自己主張」がすべての基本となり，そこから明快に徹底的に議論するピンポン式会話，自分を大きく有能と見せる態度などがでてくる。逆に日本では「自己抑制」の原則から“謙譲の美徳”が生れ，“沈黙は金”が万事に作用し，まずは他人の話を黙って一方的に聞く。また自分を謙虚に小さく見せ，目立たないようにするとともに，大事なことや肝心なこと，相手を傷つけるようなことは曖昧にし，人間関係をよくしておくことに気を使う。

最後に日常生活の中でいちばん頻繁に使う慣用句として，米国では「Take it easy！」（まあ，気楽にやれよ，うまくやるんだ，落ちつけよ），日本は「頑張って！」をあげておいた。競争社会のアメリカが「まあ，気楽に」と寛大で，逆に助けあい社会の日本が奮起を促す言葉なのは一見奇異に思えるかもしれない。が，これは恐らく，米国社会が教育面では自由に勉強させ，ほめてやり，楽な気分で能力を存分に発揮させ，創造性を重視するに対し，日本は国や集団の目標をみんなで一致団結して目ざし，脱落や失敗なく達成するため，叱咤・激励型の表現をとるようになったのではないかと思う。わが国でも戦後は，特に若者の言動が次第にアメリカ化しつつあるが，ここではあくまで伝統的な文化を比較した。しかし，こうした文化の違いにも拘らず，たとえ言葉が通じなくても，人間としての喜怒哀楽の感情は同じであることを強調しておきたい。

4．文明の諸側面

(1) 文明と戦争

「戦争は文化だ」と言ったら，多くの反発を招くに違いない。それをいうなら「平和こそ文化，戦争は破壊であり，野蛮でしかない」というのが常識であろう。にも拘らず，われわれは長い人類の歴史を通じて戦争が文化や文明と重大なかかわりを持ってきたことを認めなければならない。

まず何よりも，人類は戦争の歴史に彩られているといっても言いすぎではない。記録されている人類数千年の歴史は，4つの脅威との戦いの連続だった。そして，そのうちの3つ，すなわち天変地異，飢餓，病気は先進国ではある程度まで克服することに成功しつつある。だが最後の1つ，戦争だけは規制できないばかりか，発展途上地域では冷戦後増大さえしている[35]。少し古い話だが，1960年にノルウェーのある統計専門家が計算したところによれば，記憶されている人類の歴史5,560年のあいだに1万4,531回もの戦争があったというし[36]，別の資料では，「戦争が人類の歴史1万年とともにあり，それが1万5,000回以上を数えることは厳然たる事実だ」と説かれている[37]。つまり前者では年2.6回以上，後者でも年1.5回以上の戦争が発生している。要するに，統計的には人類史上戦争のなかった年はないのである。

わが国の古代でも，1万年は続いたと見られる縄文時代は人々が争い，それを反映して土器など生活用具の彫刻文様が荒々しく，これに続く弥生時代は平和で，表現も優美になったと久しく理解されていた。が，吉野ケ里の発掘により，小高い丘陵地に3重の環濠を巡らし，見張りのための観楼を設け，中央にコメ蔵(ぐら)を建てていたこと，人骨には矢がささり，棒で打たれたくぼみがあることから，コメなど備蓄食糧争奪のための争いを繰り返していたこと

35）G. ブートゥール，高柳先男訳『戦争の社会学』中大出版部，1980年刊。
36）福島康人『世界情勢の読み方』産能大出版部，1982年刊。
37）大澤正道他『世界の戦争史』，日本文芸社，1999年刊。

が明らかになった。

こう見てくると，人間が闘争の動物であり，闘争が多分に人間の本能に根ざしたものであるといわざるをえない。しかも，科学技術の進展，経済生活の向上，兵器の発達などにつれて闘争の規模，範囲は広がり，それを放置しておくと世界は荒れ，人間が長年手をかけて築きあげた文化・文明まで破壊するようになる。そこで，これを防ぐため1つの制度として戦争の形式をとり，ある時点での決着を図るようになった。屁理屈めくが，このような説明も立てられている[38]。

さらに，戦争は非情であり，家族愛，友情，人間の信頼関係を容赦なく引きさくし，動員された兵士ばかりか一般大衆に犠牲をしいる。相互不信，放火，掠奪，殺戮，破壊……とおよそ悪いことずくめだ。しかし他方で，それが人類に被益し文明の進歩に寄与した面のあることもまた否定できない。

たとえば，古くは城塞都市に保護されて発達した農業，戦争の用に供するため改良・訓練され，農耕・輸送にも貢献した馬，若者の教育訓練機関として知的水準の向上に寄与した軍隊，航空機・船舶・レーダー・ペニシリン・コンピューター・原子力・ジェット推進，また各種の経営・管理手法などなどが軍隊で開発され，やがて民生面に適用されたことはよく知られる。ともあれ軍隊には，一般に表4のようなマイナスと同時にプラスの効用があるとされている。戦争は数多くの文学，絵画など芸術作品も生んだ。それに，戦争が新しい文化をもたらし，新しい時代をつくったという指摘もある[37]。

すなわち，紀元前3世紀に20歳台の若きアレクサンダー大王がペルシャ遠征によって建設したインドからエジプトに至る大帝国は，彼の没後分裂したが，結果的にはオリエントとギリシャの政治・経済・文化を融合させ，ヘレニズムという新しい文化を生みだした。また，13世紀に4代70年をかけてジンギス・ハーン（成吉思汗）がユーラシア大陸の大半を征覇し，“暗黒時代”の現出とばかりマイナス視されたモンゴル大帝国が，最近では東西文明を繋ぐ世界史の出発点だったと見られるようになっている。それに，日本が豊か

38）注37），大澤著に同じ。

表4　軍事力の一般的効用

	正の効用	負の効用
1 政治面	●独立国の象徴，国家威信の象徴，国家（民族）統一の象徴 ●力の象徴，国家存在の宣明，政治目的達成の手段 ●国家の伝統的遺産の誇示，軍事的栄光の継承者	●軍国主義化の恐れ ●軍閥の形成 ●軍部の政治支配
2 法律面	●国家固有の権利	●国際法の無・軽視 ●（違憲批判）
3 軍事面	●武力による威喝の排除，軍事的脅威の除去 ●力の均衡の維持 ●直接・間接侵略の抑止と対処，戦争の遂行 ●情報収集（米のＵ２型機，米ソの偵察衛星など） ●人質救済	●戦争誘発の危険 ●戦争巻き込まれの可能性
4 外交面	●国家（外交）利益の追求，影響力の行使 海外権益の維持拡大，居留民の保護 ●集団防衛の分担，国際平和への寄与 ●国家の代表権（軍艦，軍旗），儀仗行為	●近隣諸国への刺激 脅威の譲成・付与
5 経済面	●不況脱出の突破口，有効需要の創出，所得効果，雇用の拡大，繁栄の支柱 ●管理手法の修得 ●武器輸出（それに伴う影響力の拡大は外交面の，また防衛力の強化は軍事上のそれぞれ効用となる）	●インフレの促進 ●競争機能の後退 ●税負担の増大，経済成長の低下 ●産軍癒着の公算 ●大企業への資本集中
6 技術面	●先端技術の開発（いわゆる技術の波及効果）	
7 社会面	●政府（政治権力）の擁護，治安維持 ●民生協力，災害救助 ●青少年教育，職業（技術）訓練（技術面の効用にもつながる） ●国民の誇りの対象（たとえば第２次大戦前の軍艦長門，戦時中のゼロ戦など）	●治安出動への反発 ●反軍思想・運動の醸成 ●反政府・反社会的活動への契機付与

出所：福島康人『世界情勢の読み方』産能大出版部，1982年刊。

な国アメリカに挑んで惨敗した太平洋戦争（当時の呼称は大東亜戦争）[39]は，国力の差を軽視した無謀な行為との謗りを免れないが，戦後，ヨーロッパの植民地主義は後退をよぎなくされてアジア諸国がつぎつぎに独立し，今日では“アジア・太平洋時代”の到来に道を開いたという声さえある。以上のようなことから，「戦争は文化である」という言い方が極端にすぎるとしても，「戦争は文化あるいは文明の重要な一部だ」とは表現できるのではないだろうか。

(2)　国民国家，グローバル化，世界文明

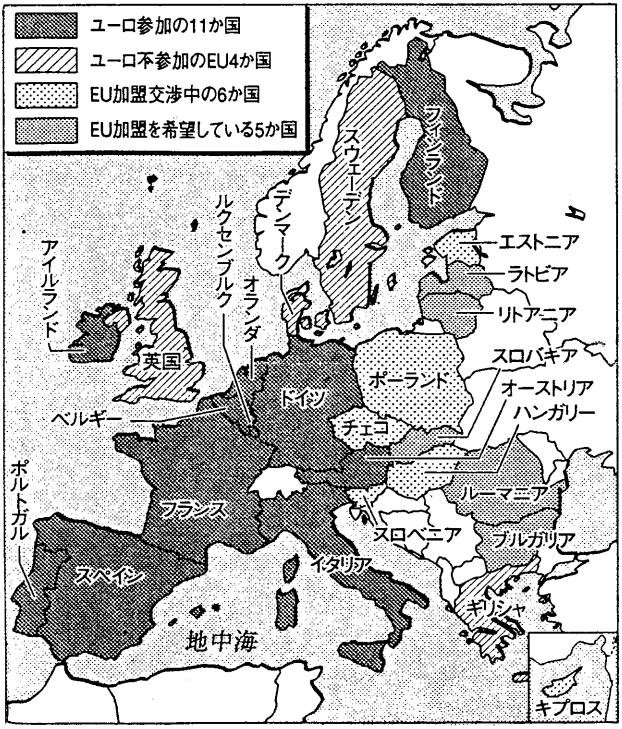
冷戦の終焉に伴い情報・通信・交通手段などの進展に支えられて経済のグローバル化が進み，従来の国家の枠組みは揺らぎつつあるかに見える。しかも「21世紀は国家解体の世紀になると思う」[40]と明言する声さえある。ヨーロッパ連合（EU）の発展がこうした議論に拍車をかけていることも事実だ。

まずEUの歴史だが，その発想は古くドイツの政治学者クーデンホフ・カレルギー博士（母親はその父で駐日オーストリア代理公使に嫁した日本人青山みつ）が中世以来くり返されてきた骨肉相はむ欧州戦乱の悲劇をなくす目的でヨーロッパの統合を提唱し，1926年に欧州連盟を結成したことをもって嚆矢（こう）とする。第2次大戦後，欧州石炭鉄鋼共同体（ECSC，1951年）→欧州経済共同体（EEC，1957年）→これらと欧州原子力共同体を糾合した欧州共同体（EC，1967年）と統合が漸次進展し，1993年1月に欧州統合の第1段階である市場統合を実現。続いて同年11月，欧州連合（EU）が正式に発足し，計画より大幅に遅れて1999年1月に第2段階の通貨統合を達成した。図5は参加，不参加，加盟交渉中，加盟希望表明諸国の状況を，また表5は米国，

39）日・米英開戦直後の1940年12月12日，わが情報局は閣議決定に基づき「今次の対米英蘭戦は支那事変（戦後は日中戦争と呼ぶ）を含めて“大東亜戦争”と呼称し，大東亜新秩序の建設を目的とする」旨発表した。しかし大戦終了後の極東軍事法廷はこれらを“太平洋戦争”と命名し，大東亜戦争の呼称を禁じた。

40）『20世紀から21世紀へ――日本と世界』鼎談の中での梅棹忠夫氏の発言，朝日新聞，1998. 5. 4。

図5　欧州連合（EU）：統合の動き



出所：読売新聞，1998，12. 26

表5　ユーロランド，EU，米，日のGDPと人口

国別区分	国内総生産（GDP）	人　口
ユーロ参加11か国	6兆1,000億ドル	3億人
EU 15か国	8兆500億ドル	3億7,700万人
米　国	6兆5,700億ドル	2億6,900万人
日　本	4兆700億ドル	1億2,600万人

出所：図5に同じ。

日本との経済力，人口の比較を示す。

しかも，EUは第3段階として安全保障面の統合を予定している。通貨統合の難産ぶりに照らしても，国家主権の根幹をなす安全保障政策，そして国家意識の強烈な軍隊の統合にはそれ以上の苦渋を伴うことが予想される。ヨーロッパ統合の動きが刮目に値する世紀の大実験であり，その進展が国家主権を大幅に制約し，ウエストファリア条約（1648年）以来の国民国家（Nation State）の存在理由をゆさぶっていることは否定できない。

しかし，同時に以下のことにも目を向ける必要がある。すなわち，冷戦終焉後の1990年代，ソ連邦ではロシアを除く14の構成共和国がすべて独立，ユーゴスラビアでもチトー大統領の死後は5つに，またチェコスロバキアも2つにそれぞれ分裂し，少数民族を抱える国々を警戒させた。このためヨーロッパは既存国家の領土的枠組みの変更を禁じる措置をとっており，中・東欧諸国もこの取り決めに支えられて漸くEU入りを表明できるようになっている。加えて非知識型労働の自由移動も当面規制している。つまり欧州の統合も，実はこうした支えと規制の中で試行錯誤的に進められているのであり，その気運が世界に充満しているわけではない[41]。カナダ，中国，インドネシア，スペインを始め少数民族分離独立の動きはなお存在するし，国情が複雑で民族意識の旺盛なアジアに統合の日程が近々描けるとは思えない。つまり統合は経済的先進地域ヨーロッパの前衛的実験であり，発展途上ないし中進地域にはむしろ民族自決と強烈な国家意識つまりナショナリズムが支配的なのだ。

つぎにグローバル化というが，これも経済の領域でいわばアメリカ式自由貿易の共通基準を世界化させようというものだ。わが国もこれまで，米国の国内法であるスーパー301条を楯に市場開放や公正な貿易を迫られ，貿易摩擦への対応に追われてきた。他方，アジアを襲った経済危機の中で韓国，ついでロシアに，国際通貨基金（IMF）は資金援助と引きかえに財政・貿易赤字の改善や経済の合理化など形どおりの対応を性急に迫った。が，望ましい

41）佐瀬昌盛『国民国家時代遅れ論を駁す』産経新聞，1999. 1. 28。

結果を得ず，米国主導の不況対策の一方的押しつけの不適切さをさらけ出したことは衆知のとおりだ。またアジア太平洋経済協力機構（APEC）の初期段階では，発展途上国の多い東アジアに自由化の計画的推進をやや強引に迫るアメリカが大きな反発をくらった。

もとより伝統的な国民国家が，国内では非営利組織（NPO）その他の市民運動や自治体の署名・陳情，また外国軍の駐留などによって政策選択の幅を狭められ，海外からは，国連その他の国際機関やEUのような地域統合に国家の主権を制約されていることも確かだ。が同時に，国家はキメ細かな福祉政策，対外援助，景気調節，治安と防衛にいっそう大きな役割を期待されつつある[42]。こうした役割が急速に減少するとは思えず，したがって，国民国家の枠組みはまだまだ当分は存続し続けると見てよかろう[43]。別言すれば，市場原理のグローバル化が遠からず世界文明の形成に繋がると見るのも早計にすぎるといわざるをえない。

もちろん，それとは別にそもそも世界文明なるものが将来存在しうるのか，一つの文明などが形成可能かという問題には議論の余地があろう。冷戦終焉まもないころ米国ランド研究所のフランシス・フクヤマ所員は，共産主義帝国の敗退でイデオロギーの戦いは終わり，今後は民主主義という普遍的な理念が世界を支配して，平穏だが味気ない世の中になるとし，これを“歴史の終わり”と銘うった[44]。つまり世界文明の誕生を予想したかに受けとれる。だが実際には，平穏どころか宗教・民族がらみの地域紛争があとを絶たない。

確かに，これまでのところ民主主義に優る政治概念があるとは思えず，経

42）山崎正和『多様化社会の国家像』読売新聞，1997. 9. 24。

43）この他，ピーター・ドラッカー『グローバル・エコノミーと国民国家』（フォーリン・アフェアーズ，1997年秋季号－中央公論，1999年10月号）は経済的合理性や相互依存と政治的情熱や国民国家の概念が衝突したときはいつも後者が勝ったとし，金子勝『市場の歴史・国家の歴史』（大航海，20号，1998）は，市場と国家の相克は続くが市場原理には限界があり，結局開かれた共同体として国家を維持するほかないという。また塩沢由典『国家と市場に代替するもの』（同前）は，非営利団体の情熱が帰属感を与え，精神的に国家の維持を支える，というように国民国家の存続を肯定する意見が多い。

44）フランシス・フクヤマ，渡部昇一訳『歴史の終わり』三笠書房，1991年刊。

済的基準としての市場原理に比べれば問題は少ないし，民主主義は理念的に受け入れ易さを持ってはいる。つまり市場開放，自由競争といった市場原理の概念は途上国や不況に悩む国には強制しにくいし，また弱肉強食を生み易いからだ。それに市場経済の中味も日・米・欧各国とも同じではない。しかも民主主義の制度そのものさえ完全ではなく，欧米流民主主義の金科玉条視，とりわけ途上国への性急な人権批判には東アジアからの反発がある[45]。さらに，文明の定義づけは簡単でないが，地域・民族・国家ごとに異なる多様な文化の実在を尊重する以上，ハンチントンのように文明を文化の上位・拡大・同質概念と見る限り，文明もまた多様な混在となり，やがて支配的な“世界文明”が形成されるという展望はまだまだ描きえないのである。

(3)　文明と環境問題

近年，環境問題が容易ならぬ形でわれわれ人類に近代文明の再考を迫っている。ここでいう近代文明は，西欧の合理主義精神に基づき，17世紀に始まる科学（技術）革命とこれに続く18世紀末からの産業革命をきっかけとする大量生産・大量消費・大量廃棄の方式あるいは制度を指す。もとより，そこでは人間と人間集団の自由な活動を保障する民主主義体制が併存する。

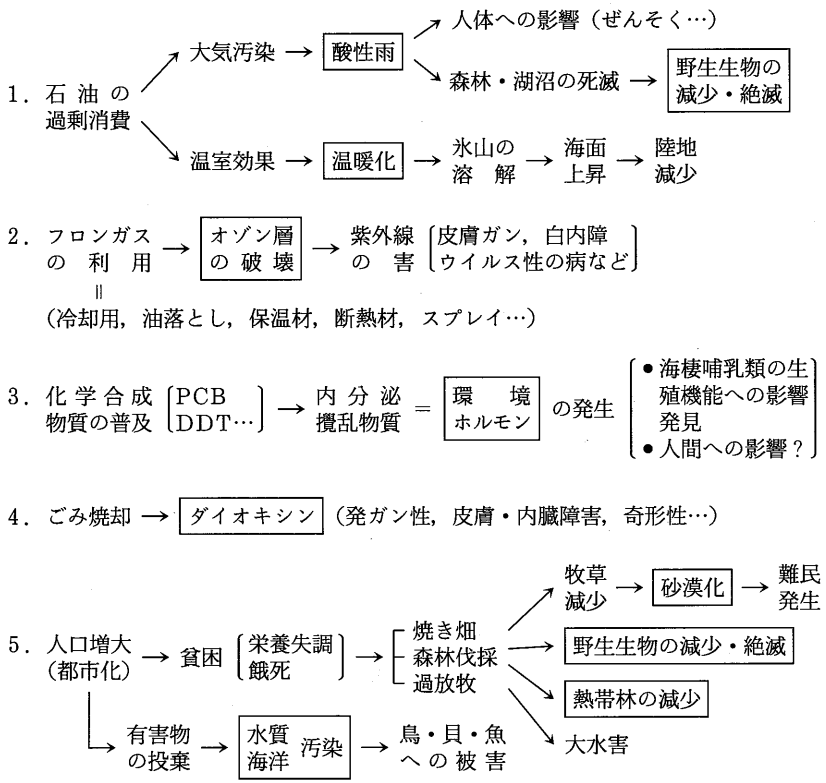
しかも，重要なのはこれらの前提をなす自然観であり，それはよく知られるようにイギリスの哲学者フランシス・ベーコン（1561～1926年）が提唱した自然支配の思想だ。つまり，自然は大いに利用すべきものであり，知力と科学の力を借りて自然を征服し人間の幸福に役立てるべきだ，というもの。この考えは工業化に成功した日本その他の先・中進国に広まり，自然の征服は進み，物は豊かに生活は便利に，また快適になったが，気がついてみると生態系の破壊が起り，人間の健康，いや生命まで脅かされていることを思い

45）大沼保昭『人権・国家・文明』（筑摩書房，1998年刊）は，アメリカが自国内の人権問題を棚上げにし，子供の権利条約を批准しないままに，またイギリスは“不義のアヘン戦争”を謝罪することもなく香港を中国へ返還した。つまり日本と違い，欧米諸国は植民地時代の歴史に縛られることなく人権外交を進めている，と批判している。

知らされたのだ。人類が数世紀にわたって憧れ求め続けてきた文明が，われわれに逆襲しようとしているわけであり，人類史上最大のパラドックスといわざるをえない。曰く，地球温暖化，砂漠化，空気・水の汚染，動植物の絶滅，それにダイオキシン，環境ホルモンなどなど。表6は環境問題の因果関係を私なりにフローチャート化したものである。

再び続けるが，われわれの祖先が火と道具を発明して文明への一歩を踏み出したときから，このパラドックスの芽は宿されていたというべきかもしれ

表6　環境問題の因果関係（一つの見方）



注：PCB：ポリ塩化ビフェニール，DDT：農薬の一種

□ 内は世上話題になっている環境問題のキーワード。

ない。つまり，人間の長寿，健康，快適な生活と利便のためには，環境や生物を多少は犠牲にしても仕方ないという一種の思いあがりだ。“公害”の名でこの問題が登場しだして以来，国連は“地球サミット”としてストックホルム会議（スウェーデン，1972年，114カ国参加)→ナイロビ会議（ケニア，1982年，130カ国)→リオデジャネイロ会議（ブラジル，1992年，180カ国）と，10年ごとに環境問題の検討を試みてはきた。

しかし，先進国とりわけアメリカは企業の抵抗に阻まれ，途上国は「われわれも公害（つまり経済成長）が欲しい」とごね，1997年には京都会議で国ごとの温暖化防止目標値まで決めたが，果たしてこれを達成できるかどうか，予断を許さない。この点で東洋には古来，ヨーロッパとは逆に自然との共生思想があり，「食べて出して肥料にする」という資源循環（リサイクル）の暮らしを営んできた。この考えを現代の生活にそのままあてはめることはできないが，ともあれ人間の英知と努力が試されており，まさしく“人類文明の折り返し点”[46]に立っているというべきであろう。

5．文明とわが国の課題

(1)　温故知新の江戸時代

本論の2－(1)－イ．「・海洋史観」(p. 9－10）の項では，ユーラシア大陸の両端に位置するイギリスと日本が貿易面におけるアジア離脱の努力によって産業・勤勉革命→(わが国の場合は江戸期）独自文明の形成に成功したのであり，日本が西欧文明の模倣・追跡に成功したのではないという川勝理論を紹介した。実は，この新説に呼応し，これを確認するかのようにわが国江戸時代の見直しが多くの論客によって近年試みられつつある。

まず「新しい歴史教科書をつくる会」を主宰する西尾幹二氏は伝統的史観をくつがえし，独自の見解を提示している[47]。すなわち，日本が古代に大陸

46）神川正彦『地球世界の人間環境』産経新聞，1994. 12. 3。
47）西尾幹二『独自の歴史観自覚するとき』産経新聞，1998. 12. 31。

から受け入れた文化も表面的・形式的であってわが国の風土に合う形に変えたし，遣唐使を廃止した（894年）時点で政治的に独立し，平安～鎌倉時代に文化的に離反し，江戸時代には経済的にむしろ中国より優越していた。つまり，このように独自の文明を既に持っていたため“西洋追いつき”をやっても西欧と同質化しなかった。しかも江戸時代の日本は既に封建社会を離脱して政治的には西欧史にいう主権国家体制をほぼ確立し，西洋と同時代感情を呼吸していた。その論拠として徳川幕府の支配権，兵農分離，石高（俸給）制の近代西欧との類似性を挙げている。このほかにも，江戸期を評価する以下のような見方がある。すなわち，

- 中国文明の圧倒的な圧力のもとでそこから離れて自らが華（はな）になっていく。自らが中国になり，中国文明を換骨奪胎していく日本。これが19世紀には間違いなく形を整えた[48]。
- 明治政府は“御一新”の名で江戸時代からの流れを意図的に断ち切っており，実際には江戸期の幕府の規制は明治以後より遙かにゆるやか，つまり自由だった[49]。
- 江戸時代の銭湯ではいろいろな人が裸で殴り合いもせず楽しんでおり，民衆の生活習慣としてデモクラシーがあったし，同後期の読み書き，そろばん能力は仏・英の水準をむしろ凌いでおり，路地で遊ぶ子供たちには長幼の秩序つまり自治の文化があると来日外人が感心している[50]。

こう見てくると，われわれはどうやら江戸時代が封建的で，貧しく，暗く，停滞した社会だったという認識を改める必要がありそうだ[51]。わが国が西欧文明を追跡・模倣したのではなく既に独自の文明を持っていたとする西尾説には蒙を開かれる思いがする。ただ，これが今後極端な“国粋”史観の方へ

48）川勝平太vs松本健一『海洋史観はアジアを変えるか』正論，1998年5月号の中の川勝氏の発言。
49）対談『覆る日本史の常識』朝日新聞，1998. 1. 1の中の網野善彦教授の発言。
50）鼎談『20世紀から21世紀へ――日本と世界』朝日新聞，1998. 5. 4の中の鶴見俊輔氏の発言。
51）注48）の中の松本健一氏の発言。

進まないことを望む。同時に，江戸時代には西洋と同時代ないし同類の感情を呼吸していたばかりか，ヨーロッパを凌ぐ面があったとか，おおらかに生活を楽しんだ時代だったという点にも率直に感心するが，日・米欧間の人権意識，科学技術水準，制度としての民主主義の違いはやはり歴然としていたはずだ。われわれの江戸時代に対するイメージほど暗くはなかったということであろう。よく，250年の鎖国によって世界の進展に遅れたというマイナス面を聞かされることが多かったが，逆に，海外からの政治・経済・軍事・文化面の圧力を長い鎖国の防壁に守られ，国内安定のうえに文化・文明を育み成熟させたと解すれば解り易い。

それにしても，戦後50年，重大な変革期の中で改めて日本文明の独自性を教えられることは，やはり嬉しい。戦後の日本人はアメリカの文化に身も心も無節操に染まってしまった感もあり，先人たちが伝統文化の独自性を守り育ててきた心意気と英知に学ばねばという思いを強くさせられる。

(2)　文明の持続継承に必要な国家観

戦後半世紀。奇蹟の高度成長によって世界第2の経済大国となったわが国だが，バブル崩壊後足掛け10年近くも大不況の底で呻吟している。未曾有の体験だ。1つにはアメリカの市場開放要求と金融自由化攻勢の罠にいつのまにかはめられていた点で，もう1つには排金物質主義の蔓延，民族的覇気の喪失，道徳観念の低落，国家・公共意識の希薄化という点で，“第2の敗戦”なる言葉がマスコミに出てくるのも故なしとしない，との想いに駆られる。それに，この後半に述べた排金物質主義以下の諸現象の遠因も，元を辿れば敗戦直後の連合軍による日本占領期に，マッカーサー総司令官が再び米国の脅威にならないようにと盛った一服の麻薬が，さては長年月をかけて効き目を表わしてきたのかとの想念が一瞬頭をよぎる。

中西輝政教授は近著の中で，「国家衰退の真の問題として精神的・文明的要因が重要な意味を持つ」として，もっぱら経済技術論的方法しかとらないできた知的風土，戦後日本のリベラルな進歩主義，共同体に比べた個人（的

関心）への過度の傾斜を活力低下の根因と見る。さらに，ボーダレス化やらグローバリゼーションという主として経済思想的流れの時代にも近代国家の持続性，文明の核にある独自性，伝統と歴史への誇りこそ重要であり，国家意識（ナショナリズム）の希薄さ，国家目標の喪失に新しい“日本の危うさ”を感じている[52]。

こうした中西教授の指摘は先に私が述べたところと軌を一にするものがある。一言で言えば国家・公共意識の希薄化だ。どうして，そうなったのか。思いあたる原因は，幾つかある。すなわち，①マッカーサー元帥が日本弱体化政策としてとった日本礼讃の禁止，日本史の否定，日本戦争犯罪論。そして左翼政党，進歩的学者・文化人，労働組合とりわけ教職員組合がこれを拳々服膺し，教育の現場で普及徹底させた効果は大きい，②戦争への反省から国家そのものを悪と見なし，これを直接語ることを避けるようになった，③憲法が国民の権利を重視し，それに伴う責任や義務について十分述べていない。そして第9条で国権の発動としての戦争と武力の行使を禁じ，戦力の保持を禁じたことの影響は大きく，これが国防の任にあたる自衛隊，その近代化・増大・海外派遣などへの反対や日米安保条約批判の土壌と風潮を生んだ。④逆に日米安保条約の存在と憲法前文で「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して，われらの安全と生存を維持しようと決意した」と謳った宣言は「自分の国を自分たちで守る」という国防意識の醸成を妨げた。⑤繁栄の中で何とか生きていける状況が個人の目標を失わせ，自己中心の生活態度を育てた，などだ。

ところで歴史認識上の区分として，1945年までの近代の歩みをテリトリー（領土争奪）・ゲームの時代，戦後の50年間は一種のウェルス（富獲得）・ゲームの時代，そしてこれからはアイデンティティ（文化的帰属意識あるいは存在価値）・ゲームの時代になるという見方がある[53]。およそ人間には生きていくうえで自分の存在価値を確かめたいという衝動や慾求があり，家族の一

52）中西輝政『なぜ国家は衰亡するのか』ＰＨＰ新書，1999年刊。
53）松本健一『アイデンティティ・ゲームの時代』産経新聞，1998. 1. 28。

員，A大学B科の何年生，C社D部の社員などなどに所属するという意識や自己確認の組合せが精神的支えになっている。今後がアイデンティティ・ゲームの時代であれば，帰属性確認の重要性はいっそう大きい。われわれ人間にとっていちばん大事なのが自分自身であり，いわゆる自己愛がすべての基本になる。それが家族愛→愛校精神→郷土愛，愛社精神，県民意識→国家意識，国防意識→愛国心と順序は違っても広がっていくのだと思う。故司馬遼太郎氏も，「人間はよほどの人でないかぎり，自分の村や生国に自己愛の拡大されたものとしての愛を持っている」[54]と書いている。わが国ではこうした愛の拡大が途中で切れている者が多いといわざるをえない。

では，国家意識の乏しい人にこれを持たせるにはどうすればいいか。「オリンピックは人を愛国者にする」というが，1つにはスポーツの国際試合を見ること，海外へ旅行し，できれば外国人と外交問題，戦争，文化，スポーツについて話しあうことなどは多少に拘らず自国愛の気持ちを蘇らせる。もう1つ，自分の国の歴史を振り返り，発展や成功の話に誇りを感じ，失敗の記録に学ぶことも役にたつ。自虐史観教育だけでは誇りを感じることができないし，国家意識が育つはずがない。過度の国家意識は嫌らしく有害だが，適度の国家意識はアイデンティティの有力な1つであり，強制して生れるとはいえないが，その意義を否定する国はない。わが国の場合は，既に述べたとおり憲法が阻害要因の1つになっているが，憲法改正への賛成意見は年々増え，既に同反対の意見を大幅に上回るまでになっており[55]，早い機会にこれを修正し，少なくとも①自衛力の保持，②自衛隊による国際協力の実施な

54）司馬遼太郎『この国のかたち』朝日新聞社，1996年刊。

55）憲法改正の是非についてつぎのような世論調査がある。（単位：%）

	賛成	どちらかといえば賛成	不賛成	どちらかといえば不賛成	調査対象	掲載紙
1.	52		27		首都圏大学生 400人	読売，9.7.1
2.	41	35	3	8	全国有権者 3,000人	産経，9.8.6
	計 76		計 11			
3.	53		31		〃	読売，11.4.9
4.	47		21		〃 500人	産経，11.5.3

どを明記することが望ましい。

さらにわが国は，戦後の高度成長により明治以来の“西欧に追いつき追い越す”という経済的国家目標を達成し，目標喪失の状態にあるとともに，国としての理念，ひいてはその進路が外国から見てはっきりしない状況を招いている。国家目標の喪失については，これまで日本人の有力な活力源となってきた目標を達成して一種の放心状態に陥り，新しい目標を見つけえないまま日本全体をおおう精神的沈滞の一因ともなっている。また理念不明の国家という点は，日本人の集団主義，太平洋戦争で見せた勇敢さ（見方によっては無謀さ）と戦後成長で示した猛烈な勤勉性と相まって，何を考えているかわからない不可思議な国，異質の国として貿易摩擦の過程でアメリカの対日警戒心を生んだ。たとえば，民主主義の国というが国民は言いたいことも言えないでいるとか，市場経済を掲げているが実際には船団護衛方式とかで競争原理が働いていないではないか，というようにだ。これらは多分に自己抑制，協調主義，没個性などわが国の伝統的文化に帰因しているが，海外には十分理解されていないのである。

そこで国家目標だが，私自身は“国際貢献（または協力）国家”ではどうかと思っている。ただ，わが国は政府開発援助（ODA）4原則として，被供与国が①環境と開発を両立させていること，②軍事的利用に役立てないこと，③軍備拡大をしていないこと，④民主化に努力していること，を設けている。が，このすべての項に抵触する中国へ最大額（1995年に14億ドルで全体の13%）を提供している[56]。これでは，海外の不信を招き，被供与国からは却って軽蔑されるだけではないか。援助の基準が不明だという批判に応えて宮沢内閣が1992年に作った大綱だが，守らない原則ならないほうがよい。また，国家理念は“民主主義”と“市場経済”でよいと思うし，日本における民主主義の制度は確立されており，市場経済も規制緩和で徐々に競争原理が拡大浸透しグローバル化に向っているが，アメリカ的内容と完全に合わせ

56）抵触の実体については拙論『国際関係と人権問題』徳山大学論叢，1997年12月号で論じた。

なければならない理由はない。わが国伝統文化との調整はあってよかろう。要は，日本的独自性の由来や特徴を海外によく説明することが肝要だと思う。

(3)　ハンチントンの世界戦争シナリオ：重要な日本の対米中対応

「2010年の世界戦争シナリオ」(p. 14) はわが国の安全保障にとって注目すべき問題提起である。本論でも既にコメントを述べ，ハンチントン教授自身が「このシナリオの実現性は小さいが，新しいパワーの出現はナチス・ドイツの例もあるように戦争の原因になり易い」として中国の登場が世界を不安定にする可能性を読者に考えてもらうために提示したのだと断っている。問題提起として重要なのはこの点だ。では，中国の今後をどう見るか。これには相反する2つの意見がある。

まず山内昌之教授の見方はこうだ[57]。中国は自己中心主義的な世界観と独特の歴史認識を持つ“帝国”の伝統を継承しており，片やグローバル・パワー米国にも“民主主義帝国”賛美論がある。中国は外にチベット，新彊（しんきょう）ウイグル抑圧の歴史，内に人権問題を抱えながらも，国内世論などを考慮する必要のない強みを持ち，対日外交には歴史認識を絡め（て台湾，尖閣諸島を持ち出し，）円借款をもらっても当然の顔をしている。中国が“皇帝のいない共産帝国”になるか“新資本家の帝国”になるかはわからないが，こうした中国の対日古典外交に日本人は鋭く反発するだろう。他方の米国も，21世紀を“アメリカの世紀”とするためには中国とイスラムの挑戦を斥（しりぞ）けなければならず，世界にとっては米国の過干渉も無干渉も不安定要因になるが，日本はこの“帝国の衝突”にまきこまれぬことだ，と。

これに対し中西輝政教授は，中国の将来に予想されるのは“超大国への道”ではないという[58]。すなわち，中国が経済・軍事力を身につけつつあることは事実だが，普遍主義重視の伝統を持つ中国は既に儒教も革命輸出という意味の共産主義も，つまりイデオロギーを失いつつあるという文明の本質に照

57) 山内昌之『新世紀の文明論構図』(中，下)，読売新聞，1999. 1. 27～28。
58) 注52) に同じ。

らして実に深刻かつ異常な事態に立ち至っている。したがって，その力をもはや外へ向けることはできない。このままゆくと中国は“21世紀の超大国”どころか“数ある小国からなる1地域”になりかねない。それは鄧小平以後の改革開放政策が，中国文明の支柱として長く守り抜いてきた普遍主義的イデオロギー，中央の政治権力，海外に依存しない自立自存の文明を破壊しつつあるからだ。しかし，そこで中国が“爆発”（ビッグバンつまり民主的大改革？）を起こせば，アジア諸文明との本質的差はなくなり，アジア共同体の誕生が可能になる。他方で，アメリカが繁栄を保持する道は強力なライバルの出現を芽のうちにソフトなやり方で摘み取ることだが，米国がこれに失敗したとき中国が爆発すれば，それこそ日本の対応の真価が問われるようになる――こう予想する。

私は，中国の将来の発展を必ずしも楽観視していないが，経済的に成功するかどうかに拘らず，アジアのリーダーシップをめぐり，ますます手強(ごわ)い日本の外交相手になると思っている。いや，既にそうなっている。この国は，①中華思想の伝統的体質，②被植民地化という苦い体験，③軍事力への信奉，④共産党独裁の権力指向，⑤経済発展の自信などから覇権を求めることは間違いなかろう。目標はアジアの盟主，そして米国と並ぶ世界の大国。だから日本は目ざわりになるし，当面の狙いは日米の分断だろう。ただ中国の前途には，(ア)およそ管理不能な巨大人口，(イ)都市部と農村地帯の所得格差，(ウ)解体困難な国営赤字企業の存在，(エ)所得上昇に伴う食料・エネルギーの不足，(オ)同じ理由による環境汚染の進行，(カ)汚職・脱税の増大，(キ)一党独裁への不満といった多くの難題が存在している。とりわけ，国内大混乱の覚悟なしに中国が共産党の解散→民主化へ踏み切れるかどうか？

米国とイスラムの対立は既に起っているが，米中2つの文明の衝突が簡単に起るとは思えない。だが，日本としては，中国へ謝罪し援助しながら言いたいことも言わないことが，日本人多数の中に不満を鬱積させることを恐れる。求めて争う必要はないし友好の努力は必要であるにせよ，“喧嘩外交”の中国には「言われたら言い返す」気魄が肝要であり，この点に欠けるだけに，

日米安保体制には日本とアジア周辺の平和と安定のための“抑止力”としての意義が大きい。戦域ミサイル防衛（TMD），日米安保協力の新指針（ガイドライン）はこの体制の抑止機能を補強するものだが，決して攻撃的性格のものではないのである。中台問題の平和解決を望みつつも，日本の無数のタンカーが通航する台湾海峡は“公海”であり，これを周辺事態の対象地域に含めることは，わが国防衛上の主権の問題ではないか。現に中国は，日米安保の極東条項の範囲をフィリピン以北とした日本政府の20年来の説明に，何ら異を唱えてこなかったのである。

あとがき

本論を書いて，「“文明”の定義は学者の数だけある」といわれるだけに，その意味をなかなか明解には掴みえない，厳密には規定できないことを痛感した。また，買い込んだ文明関係の書物をかなり読み残し，本論に十分活かしきれなかったこと，文明と戦争についてもう少し調べてみたかったこと，最後のハンチントン・シナリオに対する日本の対応策が検討不十分だったこと，宗教と国際政治と文明の関係を研究できなかったこと，がいささか心残りである。しかし退職後も，21世紀に向かい時代の流れや日本の行方を見るにあたり，文明の視点を新たに持ちえたことにささやかな充実を感じている。

最後に，在職中絶えず知的刺激を与えてくださった学長・教員各位，また研究・教育業務を支えていただいた事務職員の皆さんに心から感謝申しあげる。